

第11号

「PMFを応援する会」会報

# 協奏

2014年10月7日

## PMF2014 を振り返って

北海道情報大学教授 三浦 洋

### 竹津宜男さんのご功績とお人柄をしのんで

PMF2014を振り返るとき、大変辛く悲しいことだけでも、「竹津宜男さんのいないPMF」になってしまったことに、まずもって思いを致さなければならない。PMF開幕を目前にした7月5日、私たちの尊敬する竹津さんは、数々のご功績に満たされた79年の生涯を閉じられた。

さようなら、竹津さん。札幌交響楽団の創設やPMFのスタートなど、札幌の音楽界の「始まり」にいつも関わられた先達であったばかりでなく、北海道音楽界の「黄門さま」ともいふべきあたたかなお人柄で演奏家を励まし、常に飾らず率直に語り、音楽界の進むべき道を示した竹津さんを失った悲しみは尽きません。ご高誼を賜った者の一人として、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### マゼールの代役指揮者たち

そもそも今年のPMFが例年より1週間遅い日程となったのは、首席指揮者を務めることになっていたロリン・マゼールのスケジュールに合わせるためであったという。しかし、そのマゼールが体調不良のため降板、7月13日に84歳で急逝したことから、PMF2014は「顔」を欠くことになった。

マゼールが指揮するはずだった演奏会のうち、ベートーヴェンの交響曲第7番とシベリウスの交響曲第2番で構成されたプログラムBの方はジョン・ネルソンが代役に、そして、ショスタコーヴィチの交響曲第5番などがプログラムに組まれたガラ・コンサートの方は佐渡裕が代役に就いた。

結果はどうだったかといえば、プログラムBは相当にネルソンのカラーが出た演奏になったというべきだろう。音の強弱やテンポの遅速といった物理的特性を思い切り強調する表現は、ベートーヴェンの第7番に関しては曲の特徴と親和した側面もあったが、シベリウスの方は交響曲らしい起承転結の構造が見えない音塊になったように思う。それでも、2日連続公演だったことが幸いして、2日目は格段に精度が上がったようだ。若い演奏家たちにとっては、たった1日が、飛躍的な進歩につながる時間になることもある。

かたや、ガラ・コンサートの方は、PMFに帰って来た佐渡裕を聴衆が歓呼で迎える場になった感がある。初回PMFにバーンスタインとともに参画した佐渡にとって、図らずも、この間20年余りの指揮者としての飛躍を報告する公演になったと捉えればよいだろうか。デイヴィッド・チャンなど指導陣も演奏に加わり、150人近い陣容で奏されたショスタコーヴィチの交響曲第5番は、いかにも巨象が自分の重すぎる体を運ぶのに苦労しているような印象を与えたが、力のこもった演奏ではあった。曲の精神性まで掘り下げて仕上げるには、あまりにもアカデミー生の日程が込み過ぎている。そうでなくても、東西冷戦後に育った若者たちに、ソ連の政治体制に抑圧された音楽家の、呻吟に満ちた大曲の意味を理解させるのは至難の業に違いない。

## 北海道初演の「ナクソス島のアリアドネ」

そしてもう一つ、指揮者が交代した公演があった。リヒャルト・シュトラウス生誕150年を記念したオペラ「ナクソス島のアリアドネ」公演を指揮するはずだったチエン・ウェンピンが降板したのである。しかし、沼尻竜典への交代には期待も募った。というのも、沼尻は2008年に大阪センチュリー響とびわ湖ホールでリヒャルト・シュトラウスのオペラ「ばらの騎士」と「サロメ」を指揮して以来、「シュトラウス振り」として名声を高めていたからである。よって、北海道初演にふさわしい役者がそろったことになる。

悲劇オペラと喜劇芝居が同時に上演されるという奇想天外なストーリーを持つこの作品、喜劇グループのツェルビネッタ(天羽明恵)の歌う超絶技巧のコラトゥーラ・アリアが最大の聴きどころなのだが、悲劇グループを代表するアリアドネ(大村博美)の存在感たっぷりの歌唱が冴えわたって、両者が妍を競うステージになった。その結果、悲劇と喜劇を競い合う形で共演させるというシュトラウスの意図が、的確に反映された演奏になったように感じられる。コンサートマスターの席に着いたライナー・キュッヒル(ウイーンフィル)がぐいぐいとオーケストラを牽引していったという事実はあるとしても、沼尻の深い作品理解がなければ、あれほどシュトラウスらしい音は出なかつただろうと思う。悲劇グループのテーマと喜劇グループのテーマが掛け合う展開が実によく理解できた。とくに2度目の公演は一段と洗練されていて、歌い手たちが自在に役をこなしていたのが印象深い。これほどの出来なら、本格的な劇場公演を聴いてみたかったと思う。

## アカデミー生と指揮者たち、独奏者など

全般的にあって、今年のアカデミー生の演奏技術は高かった。しかも、どんな曲に際しても落ち着いた姿勢が見えた。一番驚かされたのは、開会式直後のオープニングコンサート(プログラムS)の第一曲、つまりPMF2014の最初の演奏曲となったベートーヴェンの「エグモント」序曲である。その素晴らしかったこと。どのパートも臆せず音を出し、速いテンポの箇所も前のめりになることなく落ち着いて音をキープできている。これには、最初の指導者を務めたオスモ・ヴァンスカの尽力が大きいだろう。ヴァンスカの指揮ぶりは、細部を彫琢する彼のカラーをやや後退させて、アカデミー生たちの若い力を100%出し切らせるといった風。若手演奏家の学ぶ国際教育音楽祭PMFを多分に意識した演奏づくりだと私の眼には映った。続く「第九」もメリハリの利いた演奏で、今年のPMFに先制ゴールを決めたという印象がある。

一方、プログラムAを振ったのはベネズエラ出身のドミンゴ・インドヤンで、PMFで学んだ経験を持つ新進指揮者。余計な演出をしない良い指揮者ではあるのだが、演奏曲目がシューマンの交響曲第2番であったり、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番であったりしたわけだから、もっとメリハリを押し出してもよかったと思う。とくにシューマンについては、初回PMFでのバーンスタインの名演を思い出すであろう聴衆を前に指揮するのは大変であつただろうけれど。

トランペットのセルゲイ・ナカリャコフが登場した特別コンサートIIを指揮したのは、ファビオ・ルイジのアシスタントとしてPMF2010に参加したガエタノ・デスピノーサ(イタリア出身)。ルイジに似て、端正で明確な振り方をしつつ、ハートフルな演奏を引き出す。ただ、武満徹の「弦楽のためのレクイエム」は微温的になって、タケミツ的な和風の冷涼さとは逆の音楽に。ベートーヴェンの偶数番の交響曲の中でも極めつけというべき交響曲第4番もユーモア精神が欠けて、ついに曲の美質が引き出されなかった。

付け加えておけば、ナカリャコフのトランペットは相変わらず素晴らしかったし、チャイコフスキーのピアノ協奏曲で独奏したベフゾド・アブドゥライモフ、ロココの主題による変奏曲でチェロを独奏したセルゲイ・アントノフの名技は褒めたたえようもない。

室内楽に関しては、ミラノ・スカラ座プラスクインテットの出演が取りやめになったのは残念だったものの、キュッヒル率いるウイーン弦楽四重奏団の職人芸には脱帽するしかないし、金管楽器とは思えないようなやわらかい音色で心を込めて歌うベルリン・フィルのプラス・アンサンブルも素晴らしかった。こうした指導陣の室内楽には固定ファンがいるようで、当日のホールの雰囲気も洗練されている。

今年は、ガラ・コンサートで行われた「セロ弾きのゴーシュ」の朗読と演奏、東儀秀樹が出演したオーケストラ演奏も記憶に残る。本当に盛りだくさんのPMF2014だった。

## 来年以降の課題

では、来年以降、PMFはどのような方向に進むのだろうか。あるいは、進むべきなのだろうか。

25回目になってバーンスタインの銅像が建ち、四半世紀の歴史の里程碑が目に見えたようにも思う。しかし、この後の25年を容易に見通すことはできない。開会式で上田文雄市長は、この先が多難であろうことも示唆していた。「教育」を目標とする音楽祭であるゆえの成果もあると同時に、難しさもあるだろう。興行ベースを中心に考えることのできない分野では、常にこの難しさがつきまとう。

私は、「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」という名に地名は含まれていないものの、やはりサッポロで行われていることのメリットを打ち出すべきではないかと思う。その点、札幌交響楽団の出番がピクニックコンサート冒頭の30分だけだったことが気になるし、今年開催された札幌国際芸術祭との関係も整理してみるべきだという思いを強くしている。



バーンスタイン像

「フラッグ」と「大看板」でPMFを歓迎しました。  
地域・地元、市民の力です！



今年も「PMFを応援する会」は、「芸術の森地区PMF支援サークル」や住民有志らと提携し、PMFの拠点「札幌芸術の森」に至る国道453号を“PMFウエルカムロード”として応援の輪をひろげました。「PMF歓迎・地域活力UPプロジェクト」と名づけたこの取り組みは、PMFの期間中、沿道に「歓迎フラッグ」100本を掲出したのをはじめ、芸術の森入り口には「歓迎大看板」を設置しました。沿線に住む方々、PMF参加者、観客の皆さまから「こうした応援もいいね！」と共感していただきました。

◇ 取り組みにご支援・ご協賛いただきました下記の、地域の各位・各社の皆さまに感謝申し上げます。

♪ 協力各社 ♪ (順不同をお許してください)

(株)プランニング・ホッコー、関口雄揮記念美術館、ヘアースタジオあかさか、カフェ ディレニー、  
函館観光大使 星沢 昇、ニシクルカフェ、(株)米谷工務店、芸術の森地区連合会、くつろぎの宿 駒岡、  
(株)スポーツショップ古内、ごちそうキッチン 畑のはる、  
芸術の森郵便局、ときわ病院、竹嶋内科クリニック、  
石山中央薬局、フナタ武道具、ダイニング ポーノ、  
きものリサイクル&ギャラリー 楓、ラ・クロシェット、  
ヤマガラ珈琲、(株)アウル ログホームズ、  
トリミングハウスこばやし、トキワ燃料店、  
層雲閣グランドホテル、正直庵

♪ 特別協力 ♪

 HTB 北海道テレビ



# 若い世代につなぐPMFの響き

2014年度 第1回「カフェ・サロン」  
6月21日(土) 札幌パークホテル エメラルド



## ご挨拶 PMFを応援する会 会長 竹津 宜男

「PMFを応援する会カフェ・サロン」へお運びいただきまして有難うございます。「PMFを応援する会」は個人の皆様からの浄財をPMFの運営の一助になれば、とPMF組織委員会に寄付をすると同時に「カフェ・サロン」の開催や札幌芸術の森地区の皆さんのご協力に沿道にPMFの幟を立てたり、ミニコンサートを実施したりするなどPMF組織委員会の手が届かないところへの普及活動をしています。

お陰様で国際教育音楽祭PMFは25回を迎えることが出来ました。改めて若い世代の人たちにPMFを身近に感じ、開催を誇りにし、ますます盛んに続けていただきたくこのカフェ・サロンのお客様は小中高の生徒さんたちにしました。どうぞみなさんPMFを大切に育ててください。(プログラム挨拶文より)

## 参加・協力団体

- 札幌市立福住小学校スクールバンド
- 札幌市立八軒中学校吹奏楽部
- 北海道札幌手稲高等学校吹奏楽部
- 札幌管楽ソリスト
- 公益財団法人PMF組織委員会

## ◆ 福住小学校スクールバンド 6年 部長 小林 未奈

今回、私たちは団員27名で参加させていただきました。

初めてのイベントで、会場がホテルだったということもあり、はじめはとても緊張しました。見ている方もたくさんいたのでみんなドキドキしてしまい、最初の演奏はあまりうまくいきませんでした。でも、ソリストのみなさんに演奏に加わっていただき、少しずつ緊張もほぐれて、演奏するのが楽しくなってきました。ソリストのみなさんは音が大きくて、とてもきれいなことにおどろきました。また、曲に合わせて感情をこめて体を動かしているということもわかりました。こんな風に吹けたらいいなあ！すごいなあ！と強く思いました。

また、指揮の先生からは「吹く前にしっかり準備する。準備の時は大きくゆっくり息を吸うことが大切」と教えていただき勉強になりました。私たちは、これからこの「夢への冒険」という曲をコンクールで演奏し、全道大会に出場する！という夢を持っています。難しい夢ですが、心一つにしてこれからも練習に励んでいきたいと思います。

今回はお忙しい中、私たちにご指導していただき、本当にありがとうございました。

教えていただいたことを忘れずにがんばっていきます。

## ◆ 福住小学校スクールバンド 6年 副部長 泉谷 美那

私は吹奏楽クリニックを終えて、たくさんの事を感じました。「プロの方々と一緒に演奏できて良かった」「色々な話を聞く事が出来て良かった」「演奏するときに気をつけていることがわかった」などです。また感じただけでなく、学んだこともたくさんあります。「息を吸うときは呼吸を整えて吸う」「音がひらかないように気をつける」など初歩的な事でも考えなくてはならないと気づかされました。

プロの方々は私たちが出来ていないことができていたので、どんどん真似をしていきたいと思っています。プロの方々と一緒に演奏するという貴重な機会に参加できてとても嬉しかったです。この経験をこのままで終わらせないように、感じたこと、学んだことをコンクールで活かせるよう、日々練習を重ねていきたいと思っています。まずは副部長の私から、教えて頂いたことを身につけ、みんなに教えてあげられる立場になるように頑張ります。そしてコンクールでは、たくさんの練習を重ねてきた最高の演奏ができるように、プロの方々や先生の言葉を忘れないようにしたいと思います。

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

## ◆ 福住小学校スクールバンド 6年 児童指揮者 中村 文香

この度は吹奏楽クリニックに参加させていただき、ありがとうございました。

私はたくさんの人の前で緊張しましたが、プロの方々にアドバイスをしてもらい、とてもいい経験になったと思います。プロの方も交えて演奏した時は、私達だけの時とはまったく違う演奏だったので、私ももっと上手に楽器を吹きたいと思いました。プロの方々に教えてもらったことを日頃の練習に少しでも生かしてとてもうれしいです。コンクールのときは、教えてもらったことを思い出しながらいっしょけんめい吹きたいと思っています。

### ◇ 札幌手稲高校 カフェ・サロンに参加して・・・3年 ホルン 芦沢 龍一郎

今回参加させていただいた2014年度第1回カフェ・サロンでは、様々なことを学び、吸収することができました。PMFの歴史からPMFの魅力、参加方法やオーディションについてなど、普段はめったに聞くことのできないことを沢山聞く事ができました。

札幌管楽ゾリステンによるサポートシステムでは福住小学校・八軒東中学校両校を見学し、音をはるかに向上したのを直に感じることができてとても良い経験となりました。ゾリステンのサポートシステムはプロの音をすぐそばで聞く事ができ、自分に何が足りないかを自分で見つけることができる素晴らしいレッスンだと思います。コンクール前や演奏会前にレッスンを受けると効果は絶大です。いつも素晴らしいレッスンを受けることができて、本当に嬉しいです。ありがとうございます。

今回学んだことを今後の部活動にどのように活かすかをしっかりと考えながら練習に励みたいです。僕自身もPMFにとっても興味があるので、大学を卒業したらPMFのオーディションを受け、参加したいと思っています。今回はこのような素晴らしい機会を設けていただき、本当にありがとうございました。

### ◇ 札幌手稲高校 自分たちの音楽を磨くきっかけに・・・3年 フルート 三國 結希

PMFを応援する会のカフェ・サロンで、サポートシステムに参加させていただくことになったとき、顧問の上西先生は満面の笑みを浮かべて私たちに「PMFだぞ」とおっしゃいました。実は、このとき私は恥ずかしながらPMFについてあまり知りませんでした。しかし、カフェ・サロン当日にお話を聞いて、PMFは「世界中のプロの卵」が集い、一流音楽家によるクリニックやコンサートを通じて素晴らしい音楽を若い世代につないでいくプログラムであると知り、国際交流にも音楽にも興味のある私はその内容に心をひかれました。カフェ・サロンは、私にとってPMFを知るきっかけとなったので良かったです。また、サポートシステムでは、いつもお世話になっている札幌管楽ゾリステンの皆さんと演奏させていただきました。今回は「3年生はゾリステン、2年生は3年生、1年生は2年生になったつもりで吹く」ことをテーマに、自分より上手い人の音を聴いてまねをして吹く練習をしました。するといつもより周りの音を聴けるようになり、力任せだった演奏が少しすっきりしてまとまりが出たように感じました。

これからは、このサポートシステムで学んだことを何度も繰り返し練習したり、プロの方の良い音楽に積極的に触れたりして、自分たちの音楽をもっと磨いていきたいと思っています。この度は貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

### ◇ 札幌手稲高校 憧れのPMF・・・3年 テューバ 上西 惇帆

吹奏楽にかかわっている高校生の誰もがPMFを知っているというわけではありませんが、私にとってPMFは憧れです。私は以前、PMFの演奏会に行った事があり、そのときにPMFに興味を持ちました。世界的プレイヤーを招いてのコンサートは聴きに来る人にとって魅力的ですが、それ以上に演奏者にとっても刺激的なのではないかと思います。

ただ、PMFの演奏会がおこなわれる時期と札幌市内のほとんどの高校の学校祭準備・吹奏楽コンクールの直前期と重なってしまっています。せっかくの素晴らしい演奏会なのでぜひ聴きに行きたいのですが、それができず残念です。

私は今回、サポートシステムのモデルバンドのメンバーとして参加させていただきました。日頃の練習では気づかないことをプロの先生方に教えてもらえるのがサポートシステムの醍醐味です。私たちがどれだけ練習しても先生方はそれを上回って、ワンランク上の指摘をしてください。きっとPMFも同じような感覚なのではないか、参加者のレベルが高い分、より高度な発見があるのではないかと、思います。無料でオーディションに参加できるとうかがい、もっと上手くなったら、参加してみたいと思いました。また、PMFの演奏会にも沢山行っていろいろな音楽に触れたいと思います。

今回、この会に参加させていただき、ありがとうございました。



スタジオ シンフォニカの畠中氏を始めスタッフの皆様、札幌管楽ゾリステンの皆様のご協力により開催できました。PMFを未来につなぐ若いパワーを結集し、参加した児童・生徒の皆さんにも感動の記憶を残すことができたこと、主催者として大変うれしく思っています。ご参加の皆様ありがとうございました。

# 「トークPMF事始め」

1989年から1991年にかけてPMFの誕生・創設に関わった方々の情熱と、世界的な音楽祭を発信するんだ、という気構えが伝わってきます・・・お話の概要をお届けいたします。

2014年度 第2回「カフェ・サロン」

8月3日(日) 午前10:00～11:45 Caffe di Lenny

田熊 勉 (PMF組織委員会 初代 事務局長)

田口昇治 (PMF組織委員会 初代 総務課長、総務部長)

須田俊彦 (当時 (財)芸術の森企画課長、同常務理事、札幌教育委員会理事)

お話は、1989年当時の状況(次ページ表参照)を押さえながら始まり、札幌が候補地となった話に入ります――

**田口:**「札幌開催へ」という事ではありますが、まず中国に「ヤング・チャイナ・オーケストラ」を編成し教育する話があり、ロンドン交響楽団の演奏、野村證券がスポンサーと決まっていたが '89年6月天安門事件が起これ北京での開催は出来ないという判断となり、梅雨のない北海道、札幌芸術の森に白羽の矢が立ち、会場確保の依頼が音楽事務所→オフィス・ワン→竹津→市へとききました。札幌市の態度を固めることなど、(当時の)板垣市長にどう説明するかということで、田熊さんから市長に話をする事になりました。田熊さん、その時の状況をお話をお願いします。

**田熊:**私共がつかんだのは広告代理店とか音楽事務所からきた話。野村證券が支援する…なんて話はするが実態がなく中身をつかめない、中国で(話が)スタートしたことなど我々の知るどころではなかった。音楽事務所からは会場確保とか具体的に日にちを決めたいとか依頼のみが先行してくる。札幌市としては半信半疑ですが実態をつかませてくれない状況でした。しかしいつまでも放っておけないので市長に私が説明するという、エライ損な役割を割り振られました(笑)。板垣市長は私の訳の分からない話を聞かれましたらね、これはもう笑い話ですが悪い前兆といわれていたしぐさである、眼鏡をはずし、ネクタイに触れ、「なんで中身が分かってもいない話を持ってくるんだ!」と、これが7月初め。事業は中身が分からない中で始まったという事でしょうかね。最初はあやふやな点があって曲がりくねった道だったんですけれども野村證券広報室が対応し接触ができるようになった体制の中で大丈夫だなと感じた。最終的には11月に事業が固まってきた。音楽的には専門家が中心になり、札幌市が後援をするという立場で実施がほぼ固まった…こんな事になるんでしょうかね。

**田口:**札幌市は協力、お金は野村が出すということで方針は決まりましたが野外ステージでの実施にハリーが固執。M.T.T (マイケル・ティルソン・トーマス)は2日前に荒地だったのが、今日来て見たら芝生が張られていて「日本人はマジックを使う!」とびっくり。第1回PMFを6月に開催しましたが基本的には札幌市は特別後援で、主催はあくまでも野村證券、音楽事務所、広告代理店。ま～そんな関係者が集まって初代の「PMFセンター」ができて、ここが主催の形になったわけです。ところがいざ始めてみると誰が責任者、誰がどういう役割か全くわからない。東京から札幌に来て動くのですから大変な混乱がありました。その最たるものが主会場となる芸術の森に置いた事務局で、担当だったのが須田さんであります。その時の状況をチョットお話してください。



**須田:**芸術の森は混乱、パニックだったのです。市役所本庁の生活文化部からいろいろ大変だとは聞いていましたが、細かくは聞いていなくて、芸森は設立して日が浅く大きな文化イベントの経験もない状況でした。89年9月頃から外国から芸森施設の視察が続いていましたが、90年1月末頃に「バーンスタインが来ることになったから芸森で受入れ対応しなさい」との命令がありました。何をするのか質問すると…内容は分からない、予算はない、スタッフはいない、ノウハウは知らないという訳です(笑)。人が集まる→何が起きるか→何をしなければならぬのかと考え、①施設活用 ②輸送対応、駐車場 ③塵芥処理など清掃 ④若手演奏者の昼食準備など、企業に見積もりをお願いし、支払いは市には予算がないので払いませんと説明しましたら企業もビックリして「本当に開催できるの?」「それはないでしょう、直ぐにでも回答がないと間に合いません」と詰められました。最終的に支払者が決まったのは開催の一ヶ月前でした。楽器のパート練習室は今の半分の規模でしたので芸森内にプレハブ仮設小屋を建てました。芸森の景観を損なうと内部からの批判もありましたが、少しの我慢だからと言って建てました。あれでも足りなかったと思います。集客数の把握、ゴミ処理、レストランでの外国人向け食事準備など前半は毎日がパニックでした。開会式に向かう車で芸森までの2kmが渋滞になり交通整理をしたことや、英会話ができる職員など若手3人の優秀なプロジェクトメンバーと共に無我夢中で仕事をしたことを思い出します。昼間は英会話できないのに、夜、夢の中に英会話が出てくるのです(笑)。夢で練習していたんですね。開会式でレナード・バーンスタインの挨拶を聞いたあの時の感動・感激忘れられませんね。スピーチがノー原稿で説得力のある洪い声での魅力あるトーク。「ああ!この人はすごい人なんだ」「これがまさしく国際教育音楽祭なんだ」と胸にジーンとききましたね。準備の疲れも抜けた感じ。ヨシッ!やってやるという気持ちで高まりました。以上、パニック対応でしたが貴重な経験でした。

田口：第2回以降の運営は行政主体で教育音楽祭を続けようと言が進みます。すでにバーンスタインと野村證券・田淵社長とが会話し野村支援の約束ができていました。90年10/1には生活文化部PMF準備室が出来、その2週間後10/14にバーンスタイン死亡の知らせが届きましたが、12/31ニューヨーク セント・ジョン・デイヴィン教会LB追悼コンサートで板垣市長は「PMFは札幌で続けます」と宣言、万雷の拍手で賞賛されました。後で側近にこんなに感動したことは札幌オリンピック以来(1972年冬季)ないと話されたそうです。91年1/24札幌市が主体となったPMF組織委員会が設立されました。事務局長：Taguma(田熊)、オペレーティング・ディレクター：Taketsu(竹津)、課長：Taguchi(田口)、係長：Takei(武井)とTで始まる名前が4人揃い、「最強4Ts」と呼ばれました(笑い)。

次に札幌への定着への話です。東京の方では第2次のPMFセンターが株式会社として関係者が出資して設立。運営主体はPMFセンターが東京で、お金とか、主催とかは地元札幌でという形です。NYには「PMFファウンデーション」が設立(ハリー社長)。ここでは理念の継承、アメリカでのスポンサー探し、ロゴの管理などをしていました。第2回は7/13~8/5開催となり、その前に東京に挨拶に行くと、大方はLB死去に伴ってPMFも終わりの考え方で、バーンスタインが死んだのにまだやるの！あるいは、誰が引き継ぐの？という反応でした。

私達に興業のスポンサー権、開催権、著作権など、権利の知識が無くて、札幌は責められたが…徐々に解決していきました。また、バーンスタインがユダヤ人であったのでよく「ユダヤに牛耳られるぞ、日本のお金を吸い上げられるぞ」と噂やデマが聞こえてきましたが、実際に運営した者として、そんなことは全くありませんでした。

実質的にプログラムから何から統括していたハリーは年に3回札幌で打ち合わせをし、田熊と対決する。そういうことが繰り返されました。

田熊：(ハリーは)バーンスタインのマネージャーとして世界を股にかけて音楽界の仕切りをある程度やっていた、そういう意味ではデカイ人なんですよ。そういう人が持ってくる話、我々は良く理解できないものですからね、3年間くらいは部屋の外にいてもわかる大声でやり合うが、5年過ぎた位から仲が良くなった。それはですね、この事業を何とか継続出来たのはハリーのおかげなんです。

1回目は音楽事務所なり、民間主導でもって完璧にやっても混乱があった。ですから2回目は札幌主体で握っていかなければ駄目という野村の意見、野村は支援するよ、超一流の音楽祭にするなら全力を挙げて支援すると。ハリー・クラウトというのは、いわば大変な“敵”でもあり、後には大変な理解者であった、そういう人もいたという事です。

田口：札幌主体で少しずつ混乱が収まってスムーズに運営できるようになりました。そして世界の音楽祭なんだと常に心がけていました。スポンサーも世界企業だから世界一流のものでなければだめだという願いもありますし、ハリーからもバーンスタインの名を汚すような音楽祭ではダメだと常に言われた。私は、「足は札幌に着けるが、目は世界に向けて…」と、必ず「世界に向けて…」と皆に言っていた。最後になりますが、こういう事業にかかわらせてもらって、大変幸せでした。

1989年 第1回PMFの始まる前の年の状況、どんな人が関わっていたか…			
札幌	東京	ニューヨーク	中国
札幌市役所生活文化部 田熊生活文化部長 田口企画係長 *チューバ・ユーフォニウム 世界大会(1990)準備中 札幌芸術の森 須田俊彦企画課長 札幌交響楽団 竹津宜男事務局長 音楽事務所オフィス・ワン 渡辺裕文社長	スポンサー：野村證券 音楽事務所：NASA 広告代理店：旭通信社 (現アサツーデー・ケイ：ADK)	音楽事務所： ハリー・クラウト アンバーソン社社長 L.B マネージャー 元ボストン警務局長 タングルウッド音楽祭にも携わる	天安門事件 (6月)

注 ハリー：ハリー・クラウト  
LB：レナード・バーンスタイン  
芸森：財団法人札幌芸術の森



「トーク」の後にはヴァイオリニスト伊藤光湖さん(PMF'93,'97,'00参加)の演奏に耳を傾けました。最後の曲は「グローリーメドレー」(アンドレ・クラウチ作曲：神に栄光あれ、ステイヴ・フライ作曲：あなたの臨在の栄光、伊藤光湖による編曲)がPMF開催直前に故人となられた竹津さんへ感謝と追悼の気持ちをこめて捧げられました。

PMF応援する会HP (<http://pmf-support.main.jp/rensai>)に故竹津宜男会長の執筆による「PMFの誕生」「PMF組織委員会の始まり」「バーンスタインの宿」「第1回開催～第2回開催に向けて」が掲載されています。どうぞご覧ください。

## 「わたしとPMF」(第2回) — PMFが届けてくれた音楽のメッセージ —

石狩市 倉岡 修子

PMFファンの皆様はじめまして、本日ここに25年前のPMFとの出会いとPMFへの思いを綴ります。PMFの第一回目最終コンサートは、レナード・バーンスタイン指揮によるベートーベンの交響曲第7番でした。“英雄”“運命”のようなニックネーム無しの第7番は、後の「のだめカンタービレ」の映画鑑賞で、ああ！あれだったのだ…と恥ずかしくなる私です。

あの頃、今は亡き弟が「これがバーンスタインの最後になるかも知れないから」とすすめてくれて手に入れた席は旧厚生年金会館、前から9列目中央でした。楽団員の顔が徐々にピンク色に染まり汗の飛び散る様が見えた時には圧倒的なサウンドとともに異次元の世界に引き込まれておりました。バーンスタインのもとで一つの大きな世界を奏で聴衆は魅了されました。

PMFのスタート目的はバーンスタイン氏の生涯最後による「次世代を担う若き音楽家の育成」そして「音楽を通して世界平和を」が夢であったとのこと。そして今、PMFオーケストラのコンサートを鑑賞する都度、一生懸命な姿から音楽のみならず人としての‘美しさ’を感じる事が出来るのです。

さまざまな角度から感動を与えてくれる‘PMF’に心より感謝しております。来る年も、来る年もPMFから若きアーティスト達が巣立ち、活躍されますように、またPMFが札幌のみならず北海道、いいえ日本の誇れるイベントとなりますように微力ながら応援します。

来年のコンサートで皆様とお会いできます事を楽しみにしております。



## PMF 25年記念企画 記憶に残るPMFの名演奏

### ベスト3を挙げます

札幌市厚別区 仮屋 志郎

☆1998年 チョン・ミョンフン

ベルリオーズ／幻想交響曲

冒頭の弱音の緊張感、そして沸き上がるクレッシェンド。指揮者と奏者の一体感をこれほど感じさせる演奏は滅多にない。まさに鳥肌が立つほどの名演奏。それを開館間もないキララで聴けたこともうれしい。

☆2005年 ネルロ・サンティ

レスピーギ／ローマ三部作とロッシーニ序曲集

はじめて聴く指揮者でそれほど期待していなかったが、若い奏者以上に若々しい音楽づくりと情熱に感動した。それに応えるアカデミー生の演奏も見事。

☆2009年 マイケル・ティルソン・トーマス

マーラー／交響曲第5番

的確で精密な指揮者の曲づくりが大成功。アカデミー生の力量が恐ろしく高く、すべての音符が手に取るように聴こえた。20周年という感慨も込められていて、情感にも事欠かなかった。

### 私の忘れられない演奏

札幌市中央区 赤石 知恵子

2010年7月12日、キララ大ホール

東京カルテット演奏会

バーバー／弦楽四重奏口短調作品11

義母の葬儀を終えて直ぐ、非日常と日常の感覚が交錯する中で聴いていたせいかもしれませんが、魂が昇華するようなそんな感覚にみまわれました。

隣で聴いていた友人から「お母さまを偲ぶような美しい曲だったわね…」と休憩時間に話しかけられたことも懐かしい思い出です。

それ以来、ますます「東京カルテット」が好きになり、2013年に活動を停止すると聞いて最後の音色を聞きに東京まで出かけました。

PMFを通じて音楽のシャワーを浴び、たくさんの出会いがありました。感謝しています。

ひき続き、原稿を募集しています。あなたの記憶に残る演奏をお知らせください。

● 送り先：FAX: 011-827-5181 メール：kaihou-genkou@pmf-support.main.jp

● 原稿：500字以内（お名前とご連絡先もご記入ください）



# 竹津宜男さんお別れの会から

札幌パークホテルにて 7月11日(金)



## 上田 文雄

公益財団法人PMF組織委員会 理事長  
札幌市長

竹津宜男（たけつ・よしお）さんの遺影を前にして、私はPMF組織委員会を代表して、また札幌交響楽団の応援団「札幌くらぶ」の会長として、更には30年来のご交誼を頂いた友人として、謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆様にご心からお悔やみ申し上げます。去る七月六日私はあまりにも突然に我が敬愛する竹津さんの訃報に接し、我が耳を疑うとともに、かけがえのない方を失ってしまった深い悲しみでいっぱいです。

札幌交響楽団の創立メンバーとなるために札幌に来られホルン奏者として活躍されたのち、そのお人柄から事務局長に就任された竹津さんは、持前の行動力で札幌交響楽団の発展に多大なるご貢献をされました。その一つが「札幌は武満徹作品を最もよく理解し最良の演奏をするオーケストラ」という評価を武満さんご自身から頂き、また映画「乱」のスクリーン・ミュージック演奏により世界の黒澤から絶賛を受けて、札幌ブランドを作り上げ、札幌にとってかけがいのない自信と誇りをもたせてくれたことが挙げられます。謂わば、武満伝説と黒澤伝説による札幌ブランドの形成の功績といえる、と私は思っております。更には、豊富な音楽経験と幅広い人脈を生かして、「札幌芸術の森」造りや「札幌コンサートホール・キタラ」

の建設にあたっての様々なご提言助言によるご貢献、PMFの組織運営の基礎づくりや札幌アートステージ実行委員会会長や札幌ACF（芸術文化フォーラム）会長として、音楽ばかりではなく広く札幌の芸術文化推進の舵取りを担って来られました。竹津さんの生涯は、謂わば今日の札幌の芸術文化の先導者であり象徴的存在であった、私はそう思います。

札幌の応援団「札幌くらぶ」の会員並びにアドバイザーとしての活躍もオーケストラと市民の溝を埋める重要な活動でした。私達の「札幌くらぶ」会報、竹津さんに連載して頂いた「札幌物語」は66回を重ねました。絶筆となった原稿の最後は札幌と指揮者の朝比奈隆さんの物語でした。最終行には「93歳の時ピアノの小山実稚恵と共演した演奏会の後で入院そのまま亡くなられたそうだと記されている。竹津さんもきっと音楽に満ちた人生、朝比奈さんのもっともっと長生きしたかったに違いない、私はそう読みました。

特に、札幌の夏の風物詩としてすっかり定着したPMF（音楽を通じて平和の実現を図る教育音楽祭PMF）においては、組織委員会のオペレーティング・ディレクターとして長くご活躍いただいたばかりでなく、退任後は「PMFを応援する会」の会長としてPMFを支えるための募金活動を展開するなど、常にPMFの発展に向け活動をしてこられました。

本年はPMFが25年目の節目を迎え、世界の若手音楽家を育てる国際教育音楽祭として確固たる地位を築くことができたのは、竹津さんの多岐に渡るお力添えの賜物と、深く感謝申し上げたく存じます。今年も26カ国地域から122名の若き音楽家が札幌に集まってまいりました。明日のオープニングコンサートでは、25回目に因んで250本のトランペットでファンファーレが芸術の森野外ステージで吹き鳴らされます。竹津さんも往年のホルン奏者としてホルンをトランペットに持ち替え250人のトランペッターの一員として参加すべく、練習をされていたとお聞きしました。竹津さん、逝くのは早すぎた、本番は明日ですよ。私もトランペットを愛するものとして、竹津さんと一緒に250本のトランペットファンファーレ、一緒にステージに立ち、高らかにPMF25回記念を祝いたかった、そう思います。

札幌市では、竹津さんの札幌の文化芸術への多大なる功績に敬意を表し、平成24年に「札幌芸術賞」を贈呈させていただきました。これからも、これまでの知見をもとに様々な場面でご活躍いただけるものと期待していた矢先の悲報であっただけに、本当に残念でなりません。

竹津さんが札幌交響楽団のメンバーになられたのは、昭和35年に初めて演奏旅行で北海道に来られた際、札幌の美しい街並みや時計台の音色に感銘を受けたことがきっかけの一つになったと伺っております。それから半世紀以上が経過し、札幌は194万人の市民が生活する、日本有数の大都市へと発展を遂げてまいりました。しかしながら、これからの将来、人口減少や超高齢化社会の到来、エネルギー政策の見直しなど、従来の価値観や考え方を前提とすることができない、謂わばパラダイム・シフトが必要な時代が到来しております。

こうした中でも竹津さんをはじめとする先人たちが築きあげてきたこの芸術文化にあふれる豊で魅力的な街を次の世代に引き継いでいくためには、国連ユネスコが認定した「創造都市さっぽろ」の名が示すとおり、日々の生活の中で創造的な取り組みを積み重ねていくことが不可欠です。竹津さんが手掛けてこられた諸活動は、そのどれもが創造性にみちあふれたものであり、市政運営の重要な指針とされるべきものであります。その精神とこれを継続実践された情熱を、私をはじめとする札幌市民がしっかりと受け継ぎ、今後のまちづく

りに生かしていくことを、ここにお誓い申し上げます。

それにしても、もうあの温和な、何時お目にかかってもし優しいまなざしの竹津さんに、そこに居られるのがあまりに当然であったコンサートホール・キタラにおいて、もうお目にかかることができなくなってしまう、この非日常を思う時、寂しさを哀惜の念を禁ずることができません。家族葬と聞き及びましたが、ひと目お会いしてお別れを申し上げたい感情を抑えきれず、ご迷惑を顧みずに押しかけ、最後にお見かけした棺の中の竹津さん、タキシードに黒タイをビシッと決められ、好きだったフォーレのレクイエムが低く優しく流れる中で、我が人生に悔いなしとばかりに満たされた平穏な表情に、私は安堵し「天晴ブラヴォー！竹津！」と心の中で叫びながら、お別れをさせていただきました。

申し上げれば限りもなく。惜別の情はつきませんが、在りし日の竹津さんのご活躍を偲び生前のご功績に心からのお労いを申し上げ、追悼の言葉といたします。どうか安らかに眠りください。



## 須田 俊彦

### PMFを応援する会 事務局長

謹んでお別れの言葉を申し上げます。

竹津さんと私との出会いは PMFが始まった1990年でした。

竹津さんが札幌交響楽団の事務局長をされ、わたしは芸術の森の企画課長でPMFの受け入れ対応で舞い上がっていた時でした。

その後もいろいろのお付き合いをいただき、竹津さんからのお誘いがある、私も「PMFを応援する会」のボランティア活動をするようになったのです。最近では毎月数回お会いし、また日常的に電話やメールなどでアドバイスをいただくなど、非常に身近で尊敬する兄的存在でありましたから、突然の訃報に茫然自失。全く言葉が出ませんでした。

今日は、ようやく少し落ち着き竹津さんが会長として情熱をもって牽引された「PMFを応援する会」についてお話をし、竹津会長を偲ばせていただきます。

この「PMFを応援する会」は竹津会長の呼びかけで、音楽ボランティア活動の経験のある有志が集まり、2009年8月に立ち上げました。発足につきましては、PMF組織委員会理事長上田文雄札幌市長にもご説明し理解をえて活動をスタートさせました。

活動理念は、世界平和に貢献するPMFの更なる発展を願い、音楽を通じて市民の立場からPMFを応援しようということにあります。

この活動に際して、竹津会長が言われた言葉を思い起こすのであります。それは「音楽は人の心に直接、訴えて感動を分かち合うことができる文化である」また「PMFを応援し生活に潤いを与え、豊かで明るい明日を築いていく努力を続けたい」と。

この言葉に竹津会長がPMFに対する本当に崇高な熱い思いを抱いておられる、と感じとったのです。

また竹津会長の目指した「PMFを応援する会」の具体的な活動を説明させていただきます。

その一つは「募金活動」であります。市民から頂いた浄財である募金をPMF組織委員会に寄附し、教育や普及活動に活用してほしいとの願いです。

会長は率先して全国に呼び掛けていただき、寄附は四年続け合計金額320万円になりました。これはアメリカのタングルウッドなどの音楽祭を視察されてきた竹津会長のかねてからの構想を実現したものです。

2つ目は市民のPMFに対する関心を高めPMFファンの共同広場を広げようとの考えに基づくボランティア事業です。「PMFカフェ・サロン」と名付けています。毎年実施しているのがPMF開催前「PMFボランティア・ハーモニー」と「PMFを応援する会」との共催コンサートでは、その年のPMFの「聴きどころ」をPMF組織委員会の方に話していただいております。本年度はさる6月21日に行いました。またPMF創設者レナード・バーンスタインを偲ぶ「ニドム・ツアー」は毎年定員二倍の盛況です。このニドムをバーンスタインの宿泊地として紹介されたのは、実は竹津会長でありました。

3つ目の活動は竹津会長が国際的なイベントであるからこそ札幌という地域・地元との繋がりが必要との強い主張から行動を起こしたことです。「地域との結びつきを持つというボランティア事業」です。芸術の森まへの国道に「PMFウエルカムフラッグ」の設置、また「PMF開催看板」の設置。

このいずれもPMFを応援する会が地元住民有志に呼びかけ、役所、PMF組織委員会、芸術の森などの連携で実現されたのであります。

そしてこれらの事業計画や結果報告を募金された方々に「協奏」という会報でお知らせしてまいりました。

このように竹津会長は時代の流れの中で変化していくPMFの未来を見つめる姿勢を育んでくださったのであります。そして音楽をとおしてこのような市民の輪が広がる活動を竹津会長とともにできることに我々は誇りを持っておりました。

竹津会長には札幌在席時代の豊かな経験、PMFにおけるオペレーティング・ディレクターをされていた時の成功や失敗、苦労話をいつも笑顔でお話ししていただきました。そしていつも人との輪を大切にされて、音楽が響く街づくりに熱い思いで、ご尽力されてきましたことが多くの方に感動を与えたのであります。竹津会長本当にありがとうございました。感謝の気持ちと悲しみで胸がいっぱいです。

今、竹津会長を失い、改めてその存在の大きさを痛感しております。

竹津会長の札幌の街が大好きという言葉が忘れられません。悲しく、残念でたまりませんが、「竹津会長さようなら」と申し上げ、終わります。



## 感謝状をいただきました。

公益財団法人PMF組織委員会に70万円を寄附したことに際し、中西常務理事から竹津会長に感謝状が授与されました。

カフェ・ディ・レニー(当会事務所)に、これまでの感謝状とともに掲示されています。

～お知らせ&お願い～

\*4月～9月末までに寄せられた寄附金は、571,338円です。

\*募金は郵便払込票にて、郵貯ATMをご利用ください。



## ♪ PMF2014 第3回カフェ・サロン ♪

### PMF創設の提唱者 レナード・バーンスタインを偲ぶ 「ニドムツアー」のご案内

毎年ご好評いただいているバーンスタインを偲ぶ「ニドムツアー」を今年度は11月6日(木)に実施することになりました。晩秋のニドムと演奏をお楽しみください。お申込お待ちいたしております。

**集合場所：**地下鉄大谷地駅1番出口を出たところ

**集合時間：**10:00

演奏は

柴田千賀子さん(Pf)、櫻井匡さん(Tp)です。  
ご期待ください!

内 容：ランチタイム(レストラン・ニクル)

コンサートとミニトーク(バーンスタインメモリアルホール)

参加費：3,500円(バス代・ランチ代を含む)

申込先：FAX 011-827-5181(締め切り10月31日) 詳細はご案内チラシを参照ください。

## ○ 応援していただいている皆様へ ○

25回を数える記念の年を迎えた今年の「PMF」。

レナード・バーンスタインの音楽と人と平和を愛した精神は、世界から参加した122名の若い音楽家、音楽愛好家、応援いただいた多くの市民の皆様を受け継がれたことでしょう。

そして7月、当会会長竹津宜男が急逝されました。悲しみと喪失感は大きく、時間だけが頼りの日々、多くの温かい言葉をいただき誠にありがとうございました。私たちは、これからも一つ一つ活動を積み重ねていきます。PMFの発展に歩みを進めていきます。皆様の変らぬ熱い応援を心より願いたします。

(PMFを応援する会 副会長 鈴木 敏明)

発行 「PMFを応援する会」

〒005-0854

札幌市南区常磐4条2丁目17-13

「カフェ・ディ・レニー」内

FAX: 011-827-5181

お問い合わせ 080-6064-7811

<http://pmf-support.main.jp/>

印刷協力 株式会社マルシン



## 〈編集後記〉

イソップ寓話の「北風と太陽」を読んだ幼い日の記憶は今も新しい。当然、北風が勝つと思ったのに太陽が旅人の上着を脱がせた結末は私にとって大きな想定外だった。

太陽のような存在だった竹津会長から受けた教養は限りがない。合掌。(あ)